

---

# 風邪の床にて

出口 常葉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

風邪の床にて

### 【NZコード】

NZ093F

### 【作者名】

出口 常葉

### 【あらすじ】

一人暮らしで風邪を引くと、普段は快適なはずの一人が辛くなる  
という話。

どういうわけか、朝からその日は気分が優れなかつた。ほんの些細な事で、社内でも一番仲の良かつた後輩の亜由美と大喧嘩した。彼女の目からは涙が溢れていた。彼女は何も言わずに、僕の前から走り去つた。

その後、一日中僕は気分が悪かつた。頭も何となく重くて、体も何となくだるかつた。

夕方、自分のアパートに帰つてきた僕は疲労感でいっぱいだつた。頭も重いし、体もだるい。呼吸するのも何だかしんどい。ちょっと寒くて、そのくせ妙に汗をかいていた。喧嘩して疲れたせいだと思つていた。気分も相変わらず悪い。

風呂に入つて疲れを取ろうと思つた。最近はすっかり寒くなつてきたから、温かい湯船に体を浸すのはたまらなく気持ちが良い。

良い筈だつたのだけど、その日は何だか余計に体が重くなつたような気がした。いつもより短めで風呂を切り上げ、ともかくも風呂場から出る。いつもなら暑くてたまらないはずが、風呂場から出たとたん体に振るえがはしつた。

嫌な予感が頭を掠める。

気持ちが昂つていたから氣付かなかつた。判断力は最早皆無に近い状態だつたのだろう。自分の体調も見抜くことが出来ないなんて。引き出しから体温計を引っ張り出して脇に挟む。アラームを待つまでもなかつた。首を捻つて見つめる液晶の体温表示がどんどん上がつていく。

結局、三十八度二分で止まつた。風邪に違いない。

風呂に入るんじやなかつたと、今更後悔が押し寄せてきた。これはまだ序の口の前哨戦。長い経験から行くと、明日からが本当の戦

いになることだろう。

念のため、枕元に体温計と水の入ったペットボトルを置いて、僕は布団にもぐりこんだ。

妙にリアルでカラフルな悪夢を見た。

翌朝。最悪の状態で目が覚めた。

体は鉄の塊のように重い。手足の指先は、氷付けにでもなつたかのように冷たい。天井はぐるぐる回るし、なんとも言えず悶苦しい。体を丸めて目を閉じる。ちょっとでも気を緩めると、意識がどこかへ飛んでいきそうだった。

熱はどれぐらいあるんだらう。枕元においておいた体温計を布団の中に引っ張り込んで脇に挟む。その冷たさは尋常ではなかつた。どうやら、相当熱はあるみたいだ。

一人暮らしで寝込むというのは本当に辛い。何しろ、家には自分以外誰もいないのだ。今、このままぼっくり行つたとして、発見されるのは何時になるやら。多分、隣人が異臭に気付いてからだから、腐るんだろうな。凄い匂いがするに違ひない。考えただけで気分が悪くなつた。

電子音が鳴つた。体温計を引っ張り出してみると、九度三分まで熱は上がつていた。恐るべし、お風呂効果。でも、確かに風呂に入るとマラソンをしたときと同じぐらい体は疲れると聞いたことがあら。風邪を引いた状態でマラソン。なるほど、悪化するわけだ。

とりあえず、会社に電話だけ入れて、僕は再び布団の中に潜り込んだ。寒くてたまらなかつたけど、やがて僕の意識は再び眠りの世界へと落ちていつた。

夢を見た。

僕は正義の使者で、日夜悪と戦つっていた。世界を守ることが出来るのは僕だけ。襲い来る悪を退け、卑劣な作戦を暴く。当然僕は狙われる日々。安息はなかなかやってこない。そんな僕をサポートしてくれる仲間達。ピンチのときには駆けつけてくれる。その中で生ま

れる一片のロマンス。彼女のためになら、命も投げ出せる。

彼女が悪の組織に捕まつた。僕は無我夢中で飛び出す。許さぬ。僕の大事な人今まで手を伸ばすとは。

頑張れ、お前ならやれる。俺達もサポートするから、ピンチになつたら呼んでくれ。彼女を頼むぜ。仲間達の熱い言葉。力強く僕は頷く。

今こそ、本当の力を解放するときが来た。待つていて亜由美、今助けに行く。

というところで目が覚めた。薄暗い部屋の中、静かに時計の秒針だけが「チ」、「チ」と小さな音と共に時を刻んでいる。仲間も、ロマンスも、敵も、何もない。亜由美もここにはいない。全ては夢だつたと知る。細く開いたカーテンの隙間から見える空が無駄に青くて、自分が今果てしなく孤独だと知つて、何だか涙が出た。

自分が自由に動けない。それだけで心はどんどん暗くなる。そんな気持ちの弱さも手伝つて、妄想はどんどんマイナス方向に傾いていく。どうしよう、このまま一度と起き上がれなかつたら。風邪なんかじやなくて、もつと酷い病気だつたら。誰にも気付かれないまで死ぬのかな。誰が悲しんでくれるんだろう。亜由美は悲しんでくれるだろうか。

ふと時計を見ると、お昼を回つていた。今頃、多分昼飯を食べているんだろうな。それから、いつもだつたら応接室でこつそり昼寝かな。僕が休んでいること、どう思つているんだろう。

携帯電話にメールは届いていない。やっぱり怒つてるのかな、昨日のこと。喧嘩なんてしなければ良かつた。両面コピーの余白なんかで怒らなきや良かつたんだ。

売り言葉に買い言葉。普段い言いたいことを言い合つてはいるだけに、自制が効かなくなつっていた。やばい、と思つていたときには亜由美の目に涙が浮かんでた。

嫌われたかなあ。休んでいるのをいい気味つて思つていたら嫌だな。

せつかく仲良くしてきただし、仲直りしたいな。謝つたら許してくれるかな。

重たい体を無理矢理起こして、水を一口飲んだ。お腹は減っていたけど、何も食べたくなかつた。少しだけあいていたカーテンをきちんと閉めて、空が見えないようにした。それから僕はもう一度布団に潜り込んだ。食欲がないのはやばいな。

ああ、死にたくないな。

そう思いながら、僕は目を閉じた。

夢の中で、僕は荒れ果てた荒野を独りで歩いていた。仲間も、恋人もいない。杖を頼りにひたすら歩き続けていた。疲労は限界。今にも倒れそうなおぼつかない足取り。行く先に一輪のつぼみ。僕はそれに駆け寄つた。つぼみが目の前でゆっくりと開く。中には携帯電話が入つていた。携帯電話が鳴つていた。僕はそれを取つた。

「もしもし……」

「あ、やっと出た」

亜由美だつた。

「へ……」

「もしもし？起きてますか？生きてますか？」

「……うん」

間抜けな声だつた。意識が、急激に浮かび上がつた。本当の電話だ。僕は携帯電話を目の前に持つてきた。暗くなつた部屋の中で、携帯電話のディスプレイだけが光つていた。通話中の名前は「亜由美」。

「もしもし、もしもし！？もう、寝ぼけてるなら切れますよ

「あ、ごめん」

「もう、具合はどうですか？」

「大分、酷いかな……」

「やつぱり

亜由美の呆れたような声。謝らなくちゃ。僕の頭にひらめいた。

「昨日、『ごめん』

「あ、ああ。うん。良いです。あの後考えたんですけど、調子悪かつたんでしょ？つい売り言葉に買ひ言葉だったけど、あのときの先輩、後から考えたら変だったもの」

「え……」

「私もちょっと言こすぎて、止めたいのに止まらないくなつて、そしたらなんか泣にちゃつて。私も『ごめんなさい』

そうだったのか。そんな事、ちつとも気付かなかつた。

「本当は昼間に電話したかったんですけど、ちょっと忙しくて。定時に帰ろうつと思つたら、どうしても昼休みに仕事するしかなくて

「え……？」

「先輩、多分本氣で寝込んでると思つたから」

「何で？」

「昨日、風邪引いてるつて自分でも気付いてないみたいだつたし、そしたら疲れたからつて風呂に入つて、おまけに湯船に浸かっちゃつたりなんかして、んで拗らせてるんじゃないかなつて」「凄いな……」

「ま、長い間後輩しますから」

亜由美はそう言つて電話の向こうでからからと笑つた。さっぱりした優しい子なのだ。

「今から行きますね。何か欲しいものありますか？」

「え……あ、果物……かな」

「りょうかーい。じゃ、一時間ほどで行きますから、死なないでくださいねえ」

電話が切れる。

暗闇の中で、その電話の通話履歴を見る。

亜由美的名前が一番上にあって、僕の空耳やうわ言じやなかつたことが証明された。

一人じゃない。それだけで、たまらなく嬉しかつた。

嬉しくて、何だか涙が出た。

きつかり一時間後。玄関のチャイムが鳴った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2093f/>

---

風邪の床にて

2010年10月10日23時46分発行